

『あの空に落ちてゆく』

著：真崎ひかる

ill：あさとえいり

あの日から廉は、毎日のように『落ちる夢』を見る。その意味するところはわからないけれど、理由が吉宗にあることだけは確かだ。

リビングの手前で足を止めた吉宗は、

「座って待ってろ」

扉を指差して短く口にすると、自室へ向かいかけ……足を止めた。なにかと思えば、着ていたトレンチコートを脱いで廉の頭上に被せる。

「うわ、なに……っ」

「そんな薄着では、風邪をひくだろう。巷にはバカは風邪をひかないという言葉もあるが、迷信だ」

「な……っ」

気遣ってくれているのかもしれないが、とてつもなく失礼な言葉だ。

コートを掴んで顔を出した時には、吉宗は背中を向けて数メートル先を歩いていた。廉に文句を言う隙を与えることなく、自室へと入っていく。

「イジワルなのか、優しいのか……わかんねーし」

手に持ったトレンチコートには、吉宗の体温が残っている。

どうしようか迷ったけれど、肌寒さを感じているのは事実で、恐る恐る質のよさそうなコートを羽織った。

縫製や生地が上質なせいか、見た目の印象よりもズッシリとしている。吉宗が着ていると外国映画の俳優のように様になっていたのに、廉では袖桁や丈を持って余してしまう。肩の位置も落ちていて、なんとも不格好な姿に違いない。

それに加えて、生地に残っている吉宗のぬくもりがなんだか落ち着かない気分させる。

「チッ、体格の差を見せつけられている気分……」

不可解な胸のざわつきを誤魔化そうと、独り言をつぶやいて眉を寄せたところで、ふと馴染みのない香りに気づいた。

吉宗には、香水をつける習慣がない。

それも、廉にはブランドなどの詳しいことはわからないけれど、どう考えても女性が身に纏うものであろう甘い花の香り。

「……オトコマエは違うね」

小さく零した廉は、唇の端をかすかに吊り上げた。

きっと、いや、確実に女性の移り香だ。それも、衣服に香りが残るほど密着していたということで……。

今夜もプライベートだと言っていたので、きっとデートだろうと予想はついていたけれど、こうして『証拠』を突きつけられると妙に生々しい。

「なんだ、突っ立ったままで」

「っ！」

リビングのドア付近から聞こえてきた吉宗の声に、ビクッと肩を震わせた。  
反射的に振り返った廉だが、吉宗と目を合わせることはできない。今、自分がどんな顔をしているのかわからなくて、怖かった。  
片手に洋酒らしきボトルと、花菜用に厨房の冷蔵庫に常備されているオレンジジュースのペットボトル、もう片方の手には氷を入れたグラスを二つ持っている。  
「好みがわからんから、適当に持ってきたが」  
「な、なんでもいい……よ」  
答えながら、吉宗の胸元に視線を泳がせた。  
自室で着替えていると思っていた吉宗は、スーツの上着を脱ぎ、ネクタイを取りシャツのボタンを二つばかり外しただけだ。  
ネクタイを緩ませることもない普段の姿からしてみればラフな格好だが、廉の部屋着のようなスウェット姿などは自宅でも目にしたことがない。  
いくらなんでも就寝時はパジャマを着ているはずだけれど、この前のようにスーツのままベッドにダイブするところを目にすると、寝ている時もスーツにネクタイなのかとありえないことを想像してしまう。  
説明のつかない動揺を抑えるため、どうでもいいことを考えて自身の気を逸らす。しどろもどろな廉に、吉宗はマイペースで言葉を続けた。  
「突っ立っていなければならぬ理由がないなら、座れ」  
「う、うん」  
小さくうなずいた廉は、吉宗と視線を合わせることでできないまま大きなソファに腰を下ろした。

本文 p144～150 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>